

日本人の大腸がんになりやすい遺伝的背景および食生活・環境因子の全国調査の結果

副院長 外科 准教授 三森 功士

九大病院別府病院の研究から

からだを
読み解く

【7】

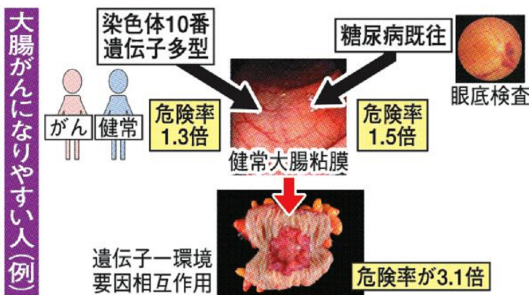


近年、日本人の大腸がんの発生頻度、死亡率が共に急増しています。大腸がんは「遺伝的に受け継がれる遺伝子多型（塩基配列の違い）」および「食生活や環境因子」が、約10年をかけて局所粘膜に徐々に影響を及ぼし続けた結果、生じると考えられています。

そこで、今回はわれわれが国内の主要9大学・病院による研究体制を確立し、全3609人（がん患者1511人、健康者2098人）に実施した、ヒトゲノム関連遺伝子多型解析結果と143項目に及ぶアンケートを分析した結果について紹介します。

①大腸がん遺伝子多型：ヒト染色体10番と8番に存在する、発がん多型を有する人は（ない人に比べて）それぞれ1・27倍、1・16倍大腸がんにかかりやすかった。両者に発がん多型の人

男性で毎週3回以上の肉食習慣 発がんリスク1.3倍に



2・2倍発がんしやすかった。

②大腸発がんに関する食生活・生活環境因子：発がん危険因子は、20歳時に太っていたこと（男性1・94倍）、毎週3回以上の肉食習慣（男性1・3倍）、糖尿病の既往（男性1・5倍）が大腸がんにかかりやすかった。

③遺伝子多型と食生活・生活環境因子の組み合わせ：染色体10番の多型に加えて、高頻度肉食習慣を持つことで2・1倍、糖尿病にかかることで3・1倍、発がんリスクが高まることを明らかにした(図)。

逆に安全因子は、ツナ食の習慣（男性1・3倍、女性1・2倍）、ビタミン剤内服（男性1・4倍）、白内障の既往（男性2・2倍）、大腸ポリープ切除歴（男性1・5倍）が大腸がんになりにくかった。

現在、簡単なアンケートと血液検査による遺伝

子多型分析を行い、「あなたは何倍、大腸がんになりやすいか？」を診断。発がん危険率が高い人には検査を勧めるといいうサービスを計画しています。

なお、便に血が付着する人、食生活・環境因子への不安がある人、大腸がんの検診の希望などがあれば当科外来へお越しください。当科ホームページ (http://www.bepu.hosp.kyushu-u.ac.jp/department/dep_03.html) も参照してください。

当科では、大腸発がんを予防し、手術が必要な場合でも、おなかをなるべく切らない腹腔鏡下手術で済むように早期発見をしたいと思います。

|| 終わり ||



ハイビジョンモニターを用いた腹腔鏡下大腸手術の光景